

主の2017年12月3日
第96号 クリスマス号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
牧師 上田 真由美

〒590-0114 堺市南区槇塚台 1-1-5
TEL/FAX 072-291-9532
メール izumigaoka9532church
@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日) 午前10時30分
- ・ 教会学校(日) 午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木) 午前10時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリヤ会・テモテ会、他

■ 教会標語 ■

『キリストを証する教会』

二千年前、ナザレの村のおとめ
マリアに、この世の主となるべき
方を身ごもるといふ、とても不思議なことが起こりました。マリアは、戸惑いと恥ずかしさと不安に
駆られました。世間に知れ渡った
ら、姦淫の罪として刑を受けなければならぬ。わたしもこの子ども
どうなるの？人の目や常識が巨大な壁のように立ちちはだかる思いが
したことでしよう。

しかし、そういう行き詰まりの中
にあって、マリアは神様のみ告
げを聞きました。聞くだけでなく、
それを信じました。み告げが一番
大きい、と。すると、神様の御姿が
大きくなり、不安がかえって小さ

くなる。そして、「わが魂は主をあ
がめます。そして、わたしはそれに
従い、それによって生きるのです。」
と神様をほめ讃えたのです。この
「あがめる」とは「大きくする」と
いう意味です。「わが魂は主を大き
くする」。

マリアの中でなぜ神様が大き
くなったのでしょうか。それには理
由があつて、「この卑しい者にも目
に留めてくださいましたから」、ま
た「力ある方が、わたしに偉大なこ
とをなさいましたから」と歌いま
す。

神様が大きくなるというのは、
神様がその権力を発揮され、威張
って何もかも打ち倒されるという



ことではありません。人間は、抑えつけられることによって、神様を本当にあげ、喜ぶようにはならないのです。むしろ反発するでしょう。

神様のなさることは不思議です。神様は本当に人間を救うために、ご自分の力をそのまま発揮しようとなさらないで、私たち人間と同じ小さくて卑しい姿をおとりになることによって、私たちを救ってくださったからです。ですから、この大きさは、力の大きさではなくて、救ってくださった恵みの大きさです。

神の御子イエス様がお生まれになりました当時の馬小屋は、貧しさを代表するものでした。馬や牛のよだれや糞尿などの臭いもしまです。神様が、わざわざ、そういう貧しさや辱めの場所をお選びになられたのは、神が神として本当に尊敬され崇められるようになるためなのです。

神様が一人も滅びないようにと、そういう場所をお選びになつて、まるで無きに等しい者になられた



ことを、マリアは自分の立場から感じざるを得なかったのでしょうか。自分が名もない田舎娘で貧しくもあつた。地位もない。そういう者を救うために、大きな神が小さくなられた。一番卑しい場所と人をお選びになつて。世間ではあり得ないことです。その驚きの事実を歌うのです。神様は本当に卑しい姿をとつて、この世においてに留めどなく。こんなにも自分に目を留めてくださっているんだわ！と。ただ、マリアの言葉はまだ美しいです。美しいだけではないこと

が、この経験にあつたはずです。マリアはただ、自分の身分だけを恥じたのでしょうか。この歌に共鳴したいと思う私たちは、一方で、社会全体から言えば、自分はマリアのような卑しい立場ではないと思うのでしょうか。もしそうならば、マリアの言いたいことを勘違いしていることになるのではないのでしょうか。この歌が、聖書によって私たちの歌になつていくことは、私たちも卑しい者だということでしょう。それでは、どんなに地位や人望があつても、すべての人にある卑しさとは何でしょうか。それは罪です。私たち自身に邪悪で惨めで悲しむべき罪があります。人の卑しさは、そこまで行かなければ分かりません。

マリアはここで、御子イエス様の母に選ばれ、神のみ前に引き出されて、神様との関係において罪にまみれた自分の姿を感じざるを得なかったのでしょうか。自分はこの役にふさわしくない。神様からこんな恵んでいただく資格のない人間だ、と。マリアにだって、私

たちと同じ、償おうとしても償えない、取り消しのきかない罪があるのです。そういう点から考えますと、人の心底までも知られ、それを引き出すようにして人の卑しさを知らせるのがクリスマスでしょう。そういう卑しさが分からなければ、御子イエス様がなぜ、栄光の天のみ座からはるばるこの世に降って来られたかが分かりません。分からないと、クリスマスを本当に喜ぶことはできないだろうと思います。

こんな卑しい者にも「目を留めてください」「自身を与えて「憐れみ」を示してください。これ以外に「偉大なこと」、つまり「救い」はあるのかと、私たちもクリスマスの本当の喜びに満たされたいと思います。



愛されてるから

生きられる



野々下 陽子

教会の平日の集会の場で、色々な質問が出て来ます。皆でその事柄を共有しながら考え語る交わりがあります。その時に私は自分が何も解らなかつた時期の事をすっかり忘れてしまつて、たくさんの事に無感覚になつて居る事に気づきます。かつて居た場所から今の所に移されているのは驚きの出来事と、いつも思い起こし心に刻み続ける事は大切だと思います。

初めて教会の礼拝に出席したのがちょうど20年前のクリスマスです。家族の事、自分の生き方の事、色々自信を失くして立ち往生してしました。礼拝に出席してまだ間もない頃、教会の人たちを見て、またその人たちが洗礼を受けてから10年、20年、30年などと年数を聞いて、とても遠い世界に生きている人々のように思えました。初めて聞く「神様はあなたを愛している」との言葉に衝撃を受け、礼拝している部屋の後ろの方に隠れるように座って周りにいる年配の人達を眺めながら、この人達が長年信じているという事は、ここは怪しい場所ではなさそうだが、などと感じながら教会に行つていまして、礼拝に出席しても聖書が何を言っているのかなか解るようになりませんし、教会で心静まる体験をしても帰宅して家族の日曜日のお昼ご飯を作り食べる頃には、聞いて来た事はどこへやら、家庭の忙しさに心はザワザワ、カリカリ、教会に行かなかつたように逆戻りの繰り返しでもありません。毎日の生活は来事に対応していかなければならぬ

いのに、自分の中には確信して選べるものはまるで無い、行く方向が見えない頼りない日々でした。無いものを数えるのではなく今日あなたに有る物を数えてみなさい、という言葉がポツと耳に入って来る時があり、今自分が持っている物は全て神様が与えてくださったっている、との言葉になるほどと合点がいく、小さな変化はよく理解出来なくてもとにかく教会に行くだけななんとか続けていつて段々と起こって行っただけでした。記憶を辿ってみると、左右に大きく蛇行してちつとも前に進まない時、立ち止りの時、穏やかな足取りの時、時に後ずさりの時もあります。今ある私は自分の力じゃない、奇跡だなと思います。どうして教会に出会えたのでしょうか。私の側から見たら、近所に誘ってくれたクリスチャンがいた、熱心に牧師が導いてくれた、教会の先輩や友が支えてくれた、確かにそうですが、全部その人たちの背後に神様がいて、その人たちの働きを通して神様が私を繋ぎ留めていてくれて、今日があります。神様から預かっている子どもたちは、マリア会でいろんな事を共有して貰い

神様によって育ちました。自分勝手に進み、自分中心に判断したい私を、人間には出来ない大きく深い愛で赦してください。教会で語られる言葉によっていつも慰めと励ましと正しい道が示され、何度でも新しくやり直させてもらい、喜びと安心を体験して来た年月です。

今年もイエス様のお誕生をお祝いするクリスマスがやって来ます。誰かが一人、新しく、教会に、聖書の一つの言葉に、神様に出会えますように。心の底から本当に安心することが出来ますように。

Ω



娘へ



斉藤 一実

私が結婚を控えたある日、母が有頂天になっていた私を見かねて言いました。あんた、自分が好いてもらえるのは、あんたが何か魅力があるわけでも、何かいいもん持っているわけでもないよ。それは全部、神様がくださったもんだからね。感謝せんとあかんよ。そのこと、忘れてたらあかんよ。」と。昔から素直でない私は「そんなん、言われんでもわかってるわよ。ぶん」と言いかえしていたような気がします。自分では有頂天になっているなんて思ってもいなかっ

たのですが、母としては、気になつて、とにかく、言っておかないといけないと思つたのでしよう。みんながおめでどう、す「いね」って誉めてくださる、お祝いに何かしましよ」と言つてくださる、ちやほやされることで私はお姫様になつてしまつていたのかもしれません。

そんなことを母から言われたことを、今、思い出しています。

そんなこと言われんでもわかつてる「って母に言つてしまつていた私ですが、気づかないうちに、実は今でも神様を見失いつばなします。ちよつとうまくいった時には、自分の力で手に入れた、こんなことをやってのけた」と自惚れてしまい、うまくいかない時には、あの人みたいにもっと自分に能力があればいいのに」と凹んでしまいます。でも、こんな私をも神様は愛してくださっている、こんな弱い私に神様はこれもあれも与えてくださつているといふ恵みを、折に触れてふと気づかされ、新たに自分を高めてくださる神様を誇りに思うものです。

娘へ。あなたは小さい時から人の気持ちかわかる優しい子でした。2歳くらいの時、私が夕方仕事から帰つて疲れて冷蔵庫の前で動けなくなつた時も、寄つてきて優しい言葉をかけて助けてくれました。小さい時はわからなかつたけれど、神様はあなたにきれいな歌声をも、与えてくださつていたのですね。

先日、二人でテレビの柔軟剤〇〇ハピネスの「マーシャルを見ながら香りで出会いが始まるなんて、そんなことある？」なんて笑い合いましたね。でも考えてみれば、あるんじゃない！キリストの香りなら！。神様にいただいたお洋服を着て、ひらひらとさせ、キリストの香りを放ちながら「このお洋服ね、素敵でしょ。この歌声もね、神様から頂いたのよ」と神様を自慢しながら胸を張つてあゆんで欲しいなと願っています。それに出会つた先生、お友達、そして今回いっしょに歩み始めたパートナーも、神様が出会わせてくださったことを感謝いたします。決して自分の力で手に入れたと勘違いすることなく、どんな時でもどこにいても神様にお委ね

してあゆんでいって欲しいと願っています。

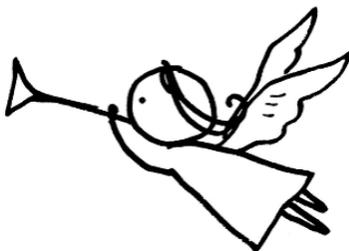
わたしたちを通じていたるところに、キリストを知るといふ知識の香りを漂わせてくださいます。

II「リント2:14

今は主に結ばれて、光となつていきます。光の子としてあゆみなさい。何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。」

エフエフ5:8

Ω



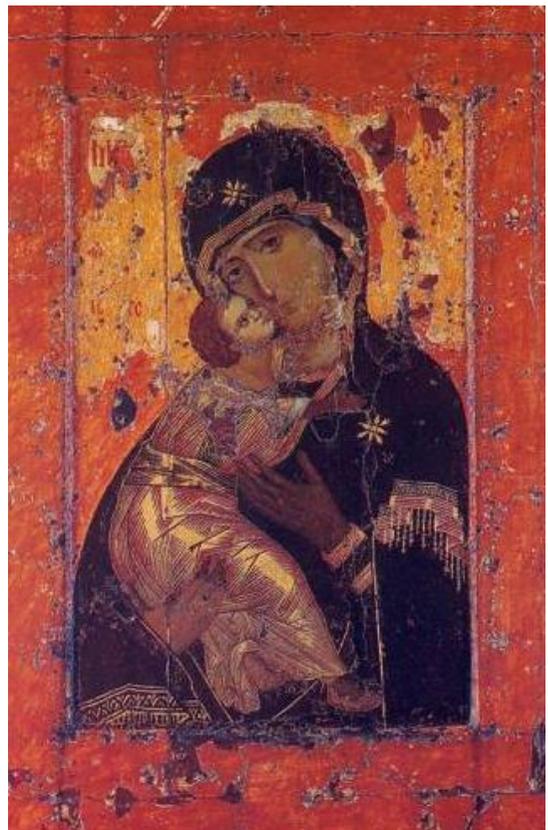


『イコン』と『聖顔』

中山 アイ子

国立トレチャコフ美術館を訪ね、門外不出の2つのイコンに出会いたいという私のたつての願いがないました。ロシア民族風な親しみのある建物の国立トレチャコフ美術館はモスクワの中心から離れた閑静な住宅地にあります。人々が絵画を楽しめ、温もりのある最高の美術館だと思いました。モスクワの豪商であり収集家であるパーヴェル・トレチャコフは「私は…国民のための美術館として残したいのです。…絵画を讚美し熱烈に愛する者にとって、すべての人びとが利用でき、楽しむことのできる、公共の所有になる、広く開かれた美術品の保管施設を設立すること以上の望みはありません。」と書いています。

ロシア・リアリズムの傑作が多く、とりわけその中心となる移動派の作品は、民衆の生活や社会問題を提起し、すばらしいものばかりでした。
1856年に開設され、4500点以上の古代ロシア美術のコレクション「イコン」を始め、11世紀から現代に至るまでのロシア美術が収蔵されています。
私が会いたかった「イコン」の一つ、『ウラジーミルの聖母』と呼ば



『ウラジーミルの聖母』

れるイコンは国の聖宝になっています。ウラジーミル公はギリシヤ正教を選び国教としました。このイコンはビザンティン帝国からキエフ・ルーシ(古代ロシアの名)に贈られたといわれています
『ウラジーミルの聖母』は、1011年にウラジーミルのウスペンスキー聖堂に祀られてから、大聖堂への巡礼が盛んとなりました。1812年のウスペンスキー聖堂の大火、1237年のタタールの戦禍に巻き込

まれましたが、そのときの被害でオリジナルの部分として残っていたのは、聖母とイエスの顔だけであつたといわれています。

このイコンは数世紀にわたって加筆されてきました。1688年12月に修復家によって加筆された部分を取り除き、原初の状態に戻しました。聖母マリアは来るべき運命を予知し、悲しげに顔を曇らせながらわが子に頬を寄せています。荘厳な魂の癒しを感じさせられました。

私が会いたかつたもう一つの「イコン」は、「天国を映し出す鏡」と呼ばれ、神の力が描かせたかのような、アンドレイ・ルブリョフ作『聖三位一体』のイコンです。

ワクワクしながら展示室を探し当て、アンドレイ・ルブリョフ作『聖三位一体』の前に立った時は、余りにも神秘的で美しく、魂が揺さぶられるような感動を覚えられました。深い瞑想の時を思わせる平安と優しさに満ちていました。

ロシアを旅していますとたくさんの「聖三位一体」のイコンに出会

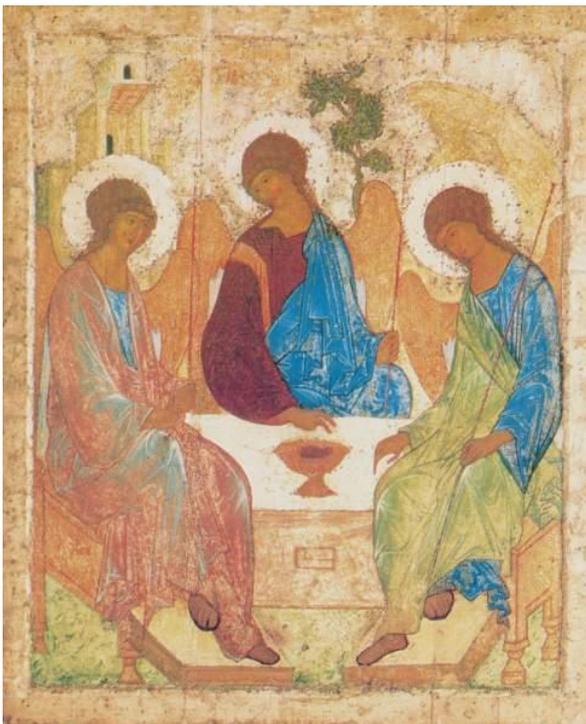
います。ルブリョフのイコンは、同じテーマが描かれているのに描写力のすごさと色使いがまったく違うのです。不思議な感動を覚えました。

改めて、アンドレイ・ルブリョフの温かな人間観と深い信仰を彼のイコンの中に見ることができました。

この時代は800年にわたって侵攻してきたタタール人により、支配され、強奪され、その上、ペスト

の流行と大飢饉で、バビロンの捕囚を思わせるような混沌と、暗闇に覆われていました。苦難から民衆は、神さまの救いを待ち望み『聖三位一体』が描かれたのです。

イコンのモチーフは、創世記第18章「主が樅の木の下でアブラハムに現れた。目を上げてみると、3人の人が彼に向かって立っていた。・・・」、アブラハムが三人の旅人をもてなし、旅人の姿の中に隠れておられる神ご自身を厚

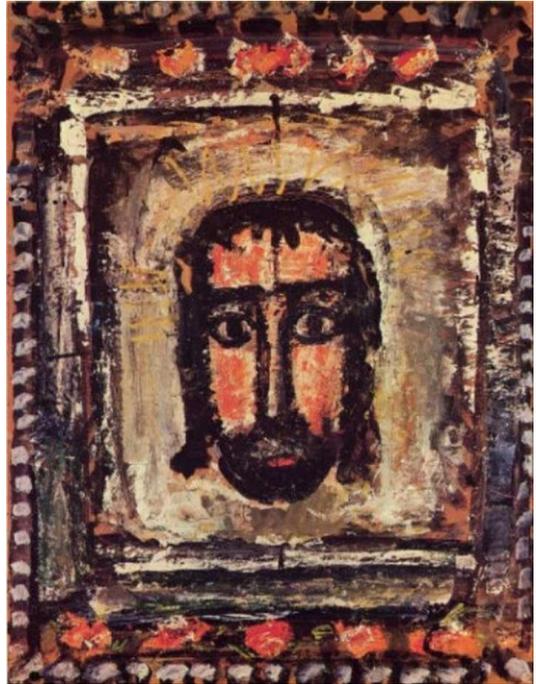


『聖三位一体』 アンドレイ・ルブリョフ

くもてなします。その後、産まれた息子イサクを、神さまに捧げるといふ、人間の信仰の行為を神さまが試されたところ です。余分なデーターはすべて省略され、神の子イエスさまを描いた中央の天使の憂いに満ちた顔は、やや頭を垂れ、静かに耳を傾けているように見えます。

レイ・ルブリヨフのフレスコ画『最後の審判』も観てきました。深い精神性をたたえたアンドレイ・ルブリヨフの芸術の根底に、大きな人間愛と優しさを感じることができました。

当時のロシア人の大半は文字を知らず、唯一の書物である聖書は高価で、字を読める者が、声をだして読んで聞かせていました。特に、長い冬の夜、ペチカを囲み、聖書物



『聖顔』 ジョルジュ・ルオー

語を聞くことが生活の一部であり、楽しみだったのです。

十字架を背負いゴルゴダの丘へ苦難の道を歩かれるイエス・キリスト。その途中、ヴェロニカがイエスさまの汗を拭いた時に、その顔が写ったという伝説を描いたのがジョルジュ・ルオーの『聖顔』です。ルオーは『聖顔』を何点も描いていますがまるで現代の「アイコン」であるかのようにです。

ルオーの『聖顔』に描かれているイエスさまは、私たちの辛さや悲しみ、寂しさ、弱さ、傲慢さをわかつて下さり、一緒にそれを背負って下さっています。

中世ヨーロッパやロシアの職人は、自分の作品にサインをしません。それは、職人組合も、市民もキリスト教という信仰や人生観を持つているので、芸術家の固有の思想は要らないわけです。キリスト教の真理を表現するのが芸術家だったのでサインが描かれていないのです。

ステンドグラスのような黒の輪郭ではっきりと描かれている作品

語を聞くことが生活の一部であり、楽しみだったのです。

十字架を背負いゴルゴダの丘へ苦難の道を歩かれるイエス・キリスト。その途中、ヴェロニカがイエスさまの汗を拭いた時に、その顔が写ったという伝説を描いたのがジョルジュ・ルオーの『聖顔』です。ルオーは『聖顔』を何点も描いていますがまるで現代の「アイコン」であるかのようにです。

ルオーの『聖顔』に描かれているイエスさまは、私たちの辛さや悲しみ、寂しさ、弱さ、傲慢さをわかつて下さり、一緒にそれを背負って下さっています。

中世ヨーロッパやロシアの職人は、自分の作品にサインをしません。それは、職人組合も、市民もキリスト教という信仰や人生観を持つているので、芸術家の固有の思想は要らないわけです。キリスト教の真理を表現するのが芸術家だったのでサインが描かれていないのです。

ステンドグラスのような黒の輪郭ではっきりと描かれている作品

を見て、ルオーはステンドグラスの職人であったこともわかります。中世の人たちは、神さまを純粹に信じる信仰を頼りに生きていました。しかし現代の私たちは、神さまに対して疑いを持つし、自分の醜さ、汚れ、そういうものを隠し自分が全てだと思つて生きています。ルオーは人間の嫌な、汚い、不透明なところは目をつぶってきれいな面だけ描くのがキリスト教芸術ですか。と現代人に問うているように思えます。

みんなが救われて、一緒に道を歩いてくださる、同行二人というか：「エマオの旅人」の聖句にある、イエス・キリストが十字架にかけられたあと、とぼとぼと歩く2人の旅人と、一緒に誰かが歩いて下さる：長い人生という旅を、一緒に歩いて下さる同伴者のことが、いつも心から離れません。

「僕と一緒に手をつないで行こう。苦しいけれども、あそこまで行こう」とイエスさまが言ってくださっているように思えるのです。

イエスさまが、威厳をもって待っていてくださるというイメージではなく、あなたが痛い時には私も痛いのだと言つて下さり、私が本当に苦しい時に、背負つて歩いてくださったのがイエスさまであつたと思えるのです。

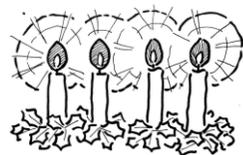
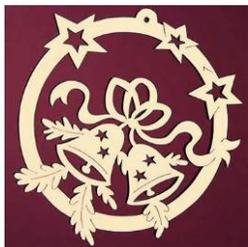
同伴者としてのイエスさまを、常に感じられる絵が『イコン』であり『聖顔』だと思えます。

「見よ。乙女が身ごもつて男の子を生む。その名は、インマヌエルと呼ばれる。」

マタイによる福音書1章23節

いつも共にいてくださるインマヌエルの恵みに心から感謝して、クリスマスおめでとうございます。

Ω



小径のほとり

徳永 雄志

芳賀 力先生(前東京神学大学学長)著の「神学の小径」 啓示への問い」を読んで、私の浅薄な理解にも認識が狭く、不足していることを悟りました。やはり何千年というユダヤ教、キリスト教の歴史は深遠で、神学は奥深く、広いものであります。クリスマス待降節が近いので、イエスの降誕を主として、随筆を「小径のほとり」として書きます。おこがましいことをお許し下さい。

「主はとこしえにいます神 地の果てに及ぶすべてのものの造り主、倦むことなく、疲れることなく その

英知は究めがたい。「イザヤ書40:28」

今から四千年ほど前、神はアブラハムという人物を選んで彼と契約を結びました。契約といってもアブラハムに対し、大いなる国民にしようとして約束されたものでした。このアブラハムの子孫がイスラエル人です。

「アブラハムは主を信じ、主はそれを彼の義と認められた。」(創世記15・6)

アブラハムの子イサク、その子ヤコブ。ヤコブの一家は飢餓のためエジプトに移住しました。何世代かを経て、イスラエルの人口は増えませんが、エジプトの王朝も代を重ねて、イスラエルはエジプト王ファラオの奴隷の民とされたのでした。

「わたしの僕イスラエルよ。わたしの選んだヤコブよ。わたしの愛する友アブラハムの末よ。」「あなたはわたしの僕、わたしはあなたを選び、決して見捨てない。」(イザヤ書41・8、9)

神はイスラエルの民を選んでモーゼを選び、指導者としてイスラエルを苦境から救い出したのです。

エジプトからの救出と約束の地への導入が現実起こる事によって、初めてイスラエルの民は個人的運命をはるかに超えた何事かを体験し、神(ヤハウェー)の神性を本当に知ったのです。歴史は神(ヤハウェー)の自己証明の場として、主の顕現を示すもので、イスラエルの原信仰告白となったのです。

これまで、神はむしろ遠来の神という性格を保持しながら、出会う者に特別に親しい関係を結ぶ神で、人間がこちら側から左右する事の出来ない方として絶対の他者として、他に見出せない自然を超越した存在でした。

最初はモーゼ等がヤハウェー礼拝を司る祭司層を形成し、シナイ山、葦の海の体験が共有され、アブラハム、イサク、ヤコブのいと小さき神がモーゼと続き、旅路にいつも同伴されて数々の物語伝承を通して示される「神、我等と共にいます」という主ヤハウェー現臨の確信が、イスラエルの自分たち共通の基盤となったのである。

この恵みと選びの確信が、合流した部族達の経験と合致してアイデンティティとなったのです。しかし、「この民は、口でわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、心はわたしから遠く離れている。彼等がわたしを畏れ敬うとしても、それは人間の戒めを覚え込んだからだ。」(イザヤ書29・13)と主は言われる。40年間60万人(民数記1章、26章)以上のイスラエルの民が荒野をさまようことになったのです。

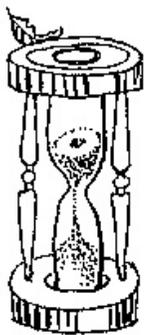
しかし、その間、身の安全と食料、水は与えられませんでした。衣服もすり切れることもないという(申命記8・2、4)他に類をみない奇跡によってカナンの地へ導かれたのでした。そして十戒を中心とする教え(律法)主の戒めと掟が授けられたのです。ユダヤ人は、モーゼ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)を律法と言っています。

イスラエルは、モーゼの後継者ヨシヤを指導者としてヨルダン川東側、西側カナンの各地を征服しました。十二部族それぞれ分割して嗣業地を受け継いだのです。

ヨシユアの死後、指導者を欠いたイスラエルは、弱体化していきまふ。民は主を求め、土師が活躍します。その中から王制へと以降し、サウルに次いでダビデが王として立ちまふ。紀元前1004年のことだす。ソロモンの死後、紀元前926年には、南王国ユダと北王国イスラエルに分裂、紀元前722年には北王国イスラエルは滅亡、紀元前587年に南王国ユダも滅亡してまふ。

ユダの民はバビロニアに捕囚となり、紀元前561年に幽閉を解かれ帰還、エルサレム神殿の修復も完成をみまふ。

神は歴史を通して言葉を介し、イスラエルに御自身の名を告げ、御自身を啓示す人格的な神だす。しかしその存在は永久にいまふ神、地の果てに及ぶものの造り主、究めがたい英知の聖なる絶対者。神の啓示とは、



人間に対する自己譲渡、無限の愛としての出来事なのだす。

この神が人間へと関わり、人間の問題を徹して御自身のものとされるのだす。これは神を人間になぞらえ描写する擬人法である。

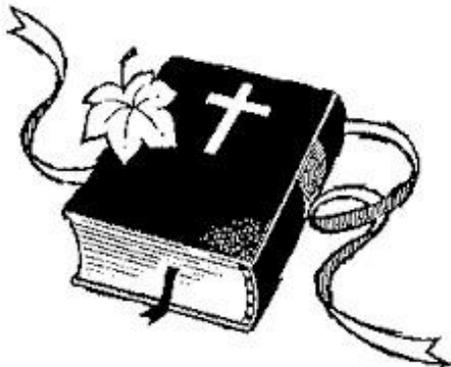
それも人間が限りある仕方でありか実現出来ないのに対して、神だけは十全の仕方だ、その人間性を完全に成就される、むしろ神こそが全（あら）ゆる人格の存在論的な根拠なのである。神は人格性を自らのうちに包括してまいる存在である。

神の擬人法的表現は、神が歴史的な人格として現れる受肉の事実に於いて頂点を極めるのだす。

受肉の事実を保って、神の本質たる三位一体が表明されたのだす。

「恵みと真理は、イエス・キリストを通して現れた」（ヨハネ福音書1・17）「神はその独り子をお与えになるほどに世を愛された」（ヨハネ福音書3・16）という事が、世を救うためだけでなく、世が神を知るためにも当てはまる事になる。

神が自ら、人間的言葉となり（十戒）、その人格を通して御自身を語



ることが、歴史的な事実となったのである。それが神の自己啓示としてのイエスキリストの誕生なのだす。

ナザレのイエスの比類のない人格、その生涯の言葉と業、そして十字架の死と復活という前代未聞の出来事に、証人として立ち会わされた最初の使徒たちの体験と証言が、新約聖書と教会に確信に至る核心となったのだす。これが聖霊の力のもとで共通の記録と物語となり、生きた伝統の中、核となりました。

神がイスラエルの民を選び、この民の言葉で御自身の意志を伝えよう

とした時、そこには信じ難いほどのへり下り、神の自己卑下が感じられる。そこまでして、人間に御自身の意志を伝えようとしておられるということがある。「これは我々の神の憐れみの心による。この憐れみによって、高い所から、あけぼのの光が、我等に訪れ、暗闇と死の陰に坐している者たちを照らし、我々の歩みを平和の道へと導く。」(ルカ福音書 1・78、79)

「神は、キリストによってわたしたちを御自身と和解させ、かつ、和解の務めを、わたしたちに授けて下さったのです。」(ニコリント5・18)

「今日、ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになったこの方こそ主メシアである。」(ルカ2・11)

「イエスの誕生を天使は喜び告げるけれど、イエスがロバに乗ってエルサレムに入られた時のように、多くのエルサレムの市民のように、ホサナ」と叫んでお祝い、我々に来るでしょうか(マルコ福音書11・8〜10)。むしろ、頭を下げ心から「ありがとうございます」

と胸の中に祈るより方法がないように思います。

十字架を経て、イエス様が復活され、「聖霊降臨を迎えて初めて、御礼、お祝いが言えるのだと思います。」

イエス様の降誕から、聖霊降臨までが、神の一連の愛の業であり、我等罪人の救いの業、「贖(あがな)い」であります。

いかに神が、はるかに人知を越えて深く、時をかけて、人間を信仰に導くために、計画をめぐらせ、策を用いて確実な手段をつくしたか、

「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことが、だれが、神の定めを究めつくし、神の道を理解し尽くせよう。」とパウロは言っています。

(ローマ書11・33) Ω



泉ヶ丘教会

クリスマスのご案内

12月10日(日)午後2時

クリスマス音楽会 無料)

12月23日(土)祝(午後5時

クリスマス夕べの礼拝

説教 上田真由美牧師

希望のうちに

『置かれている人生』

12月24日(日)午前10時30分

クリスマス記念礼拝

説教 上田真由美牧師

『喜びがいの胸に』

『あふれるので』

礼拝後 祝会と聖誕劇

ぜひお越し下さい、

お待ちしております。